

2人の女子会から 「本人つどい」の立ち上げへ

埼玉県鴻巣市

鴻巣地域包括支援センターこうのとり(委託)

精神保健福祉士 石井 喜美枝

埼玉県鴻巣市の概要



面積	総人口	65歳以上人口
67.44km²	118,555人	34,165人
高齢者化率	日常生活圏域	包括数
28.8%	5	委託5

2019年5月1日現在



<基本情報>

昔から中山道の宿場町・鴻巣宿として栄えてきましたが、現在は首都圏50km圏内という地理的条件で、東京のベッドタウンとして、県央の中核都市となっています。

花卉園芸や稲作も盛んなほか、400年続くひな人形(鴻巣雛)の産地でもあり、「日本一高いピラミッドひな壇」や「ポピーの栽培面積日本一」など、雛人形や花卉に関する日本一を持っています。



第7期 鴻巣市高齢者福祉計画・介護保険事業計画

基本理念

住み慣れた地域のなかで、いきいきと安心して暮らせるまち

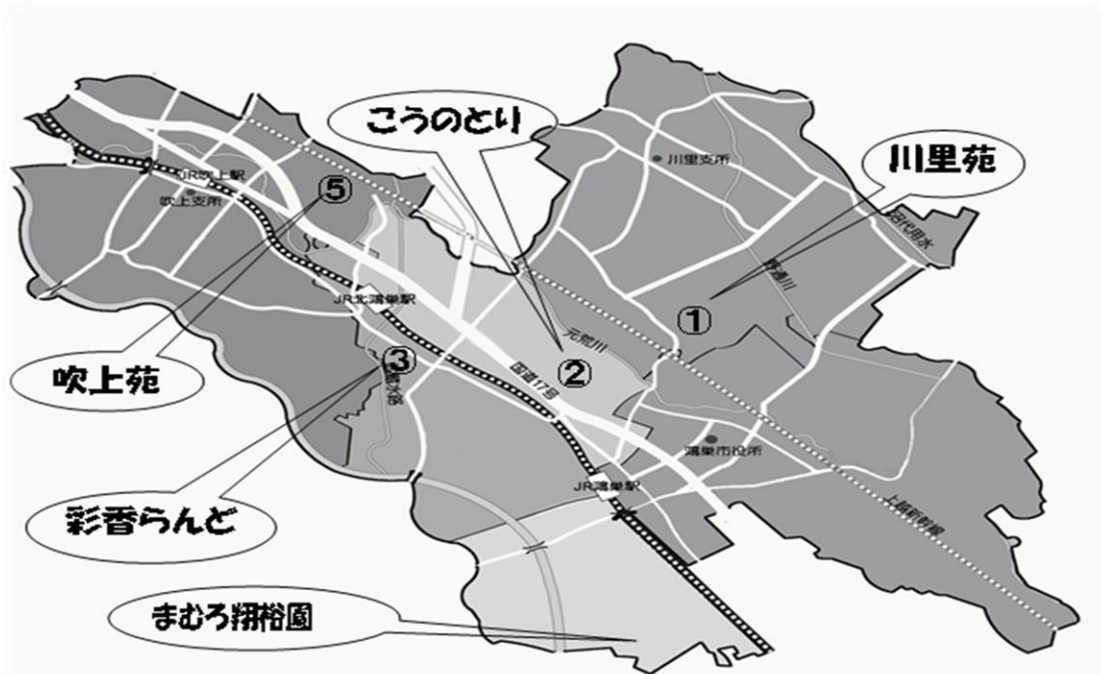
いつまでも元気で、活動的で、生きがいに満ちてくらせるまち

【認知症支援事業】

- ・認知症初期集中支援事業
- ・認知症地域支援・ケア向上推進事業
- ・オレンジカフェ
- ・本人のつどい
- ・オレンジダイヤルの設置
- ・認知症サポーター養成講座およびステップアップ研修
- ・予防啓発の出前講座
- ・ひとり歩き高齢者みまもりグッズ配布
- ・認知症予防講演会
- ・徘徊高齢者探索サービス事業



鴻巣市認知症地域支援推進員



市内全域を担当する体制として、包括「こうのとり」に推進員を専従配置。
運営母体は、「認知症疾患医療センター」を併設する精神科病院。

推進員全員が認知症初期集中支援チーム員を兼務。
医療機関・地域包括支援センター・介護保険事業所との連携を
通した活動が期待された。



平成26年8月 専従1名(看護師)配置

認知症ケアパス作成委員会参加
オレンジカフェ開設準備

市町村からはじめに
求められた活動

平成27年4月～ 専従4名体制

(看護師2名、社会福祉士1名、精神保健福祉士1名) 平成31年4月現在

主に行政から求められた活動に取り組んでいた時期

オレンジカフェ 市内3会場(5圏のうち3圏域)で開設
(平成29年に全5圏域で開催となる)

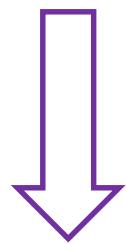
認知症ケアパス作成完了・配布へ

グループホームへの巡回相談

認知症初期集中支援チーム活動開始



●オレンジカフェの場では・・・



推進員が専門職として相談対応
初期集中支援チーム員活動との連動
ボランティア活動の場

- ・「家族からの相談」をもとに初期集中支援へのつなぎ
- ・初期集中支援から本人・家族の継続支援の場としての活用
“本人がカフェで過ごす姿は、家の中と違う！ 普通に話している・・・”
- ・「認知症」を身近に理解する場

これらの活動を通して、

認知症の本人や家族の声をキャッチすることから
今後の推進員活動に向けたヒントが得られるのでは・・・

相談できる場を増やしたい＝オレンジダイヤルを開設
(認知症なんでも電話相談 週2日)
若年性認知症本人のボランティアカフェスタッフ参加



認知症の
人や家族
の声を
キャッチ

初期集中
支援

オレンジ
ダイヤル

若年性認
知症本人
の支援

オレンジ
カフェ

ボランティアの協力

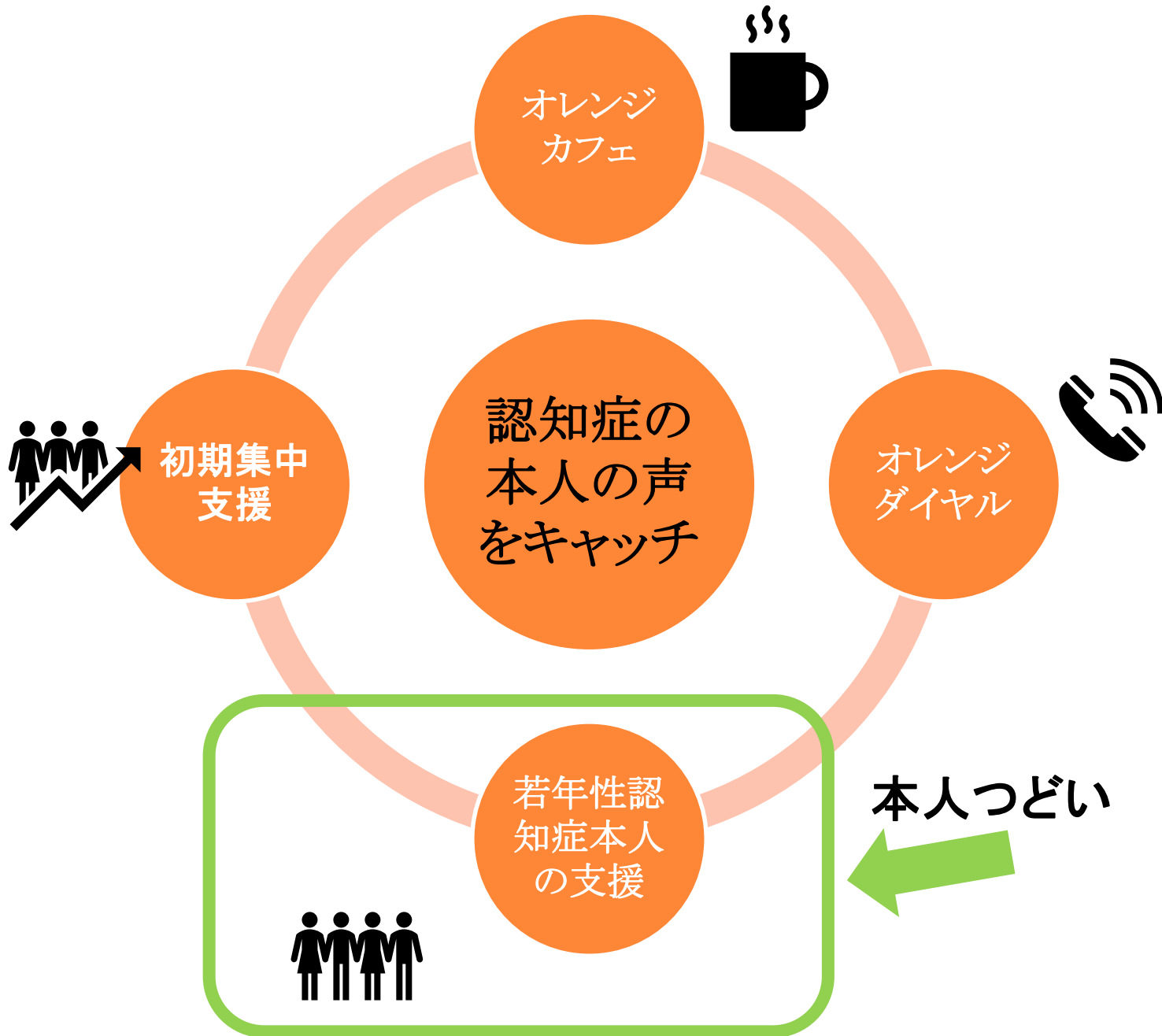
相談から支援につなぐ場

認知症の人が暮らす
地域を考える

認知症の人や家族と
出会う場

他の専門職との連携





鴻巣若年性認知症本人つどい『ブルームンの会』

(平成30年7月～)

若年性認知症の方、認知症ではないかと心配されている方が集い、語らう場

開催日時: 奇数月第2木曜日 10:00～12:00

会場: 鴻巣吹上生涯学習センター 視聴覚室
(JR高崎線吹上駅 南口徒歩3分)

参加者: 鴻巣市内の若年性認知症の方
+ 県内の若年性認知症の方
(現在40歳代～70歳代までの方々が参加中)



特徴

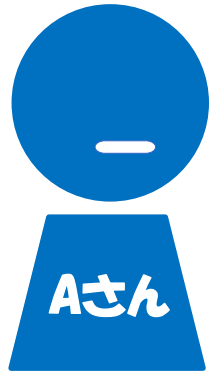
- ・若年性認知症当事者本人からの一言が立ち上げのきっかけとなった
- ・若年性認知症支援コーディネーターと連携することにより、市内の当事者のほかに、県内の当事者も参加できる場



この活動に取り組んだきっかけ

推進員と2人の当事者との出会いから・・・

最初のきっかけは。



失くし物の失敗を嘆きながら
過ごすAさん

もの忘れの失敗や今後の不安を抱えるのは
Aさんだけではないことを伝えたい。

最近、元気な当事者が話題になっているし。
Aさんも当事者の方と出会える場があるといいかも。



埼玉県若年性認知症コーディネーターに
電話で県内の当事者活動について相談



㊦
「認知症の人と家族の会」が主催する
若年のつどいがあるから参加してみては？



Aさんと一緒に「若年のつどい」に参加してみたところ、



参加して良かった！
何か自分にもできることがあるかも、という気持ちになれました。また、行きたいです。

今日は久しぶりに電車に乗りました。
一緒に行ってもらえたから安心でした。
最近は降りる駅を間違えて大変なことになるから怖くて乗れなかったのですよ。

① 推 Aさんがすごく生き生きとしている！
当事者同士が話せるというのは、やはり良いこと。
でも、電車を乗りながらでは、難しいかも。
地元で開催できたら、Aさんも気軽に自転車で行けるのに…

あ!!そうか。



② 当事者が2人揃えば、
鴻巣でも“つどい”ができる。



そしてもうひとは・・・



①推

Bさんだけじゃない。同じ思いをしている人が近くにいることを知ってもらいたいけど・・・

近くにいるAさんと出会ってもらいたい。でもどうやって紹介しよう・・・

「辛い思いをしているのは私だけ？」
孤立感を抱えるBさん



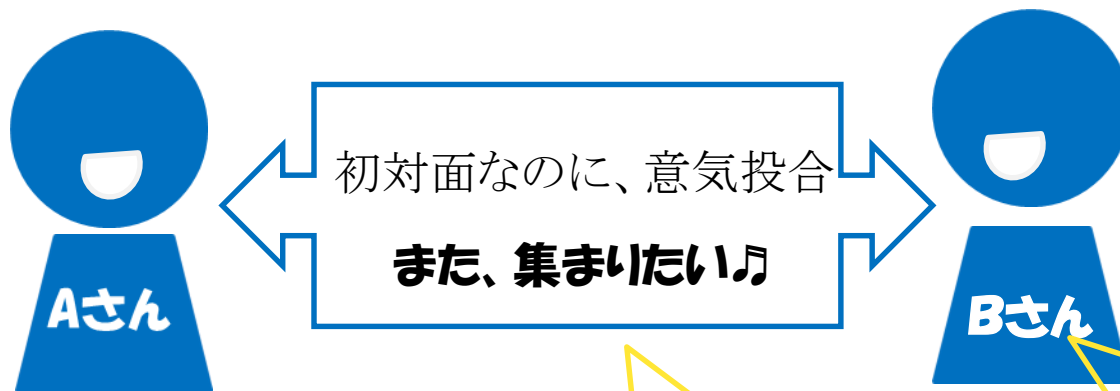
②コ

Aさん、Bさんに出会いの場をつくろう。
今度、オレンジカフェで
Aさん、Bさんと私たちが女子会しちゃおう♪



女子会の開催へ

オレンジカフェに2人を誘い、顔合わせ。



ちゃんとお化粧している
じゃない、偉いねえ

もの忘れあるある！

お化粧すると気合が入るのよ。

すぐ、忘れちゃって
嫌になる。

私もよ。だから
メモ魔になったのよ。

あら、家族構成が一緒ねえ

Bさん母

こんなにいい表情久しぶりにみた・・・



さらにこんな展開が...

①推

コーディネーターと共同開催とすれば、推進員も心強い！
そして参加する仲間も増える！

②コ

コーディネーターと一緒に市外の人も参加する形にできない？

鴻巣市認知症
地域支援推進員



市



県

埼玉県若年性認知症
コーディネーター



= 連携 =

鴻巣市に住む若年性認知症の方々

県内の若年性認知症の方々

鴻巣を会場に、市内と市外の人と一緒に『つどう』場づくりを計画することに



計画を市の担当者と話し合う

市の担当者に「本人つどい」を開催したいことを相談

①開催する意義

若年性認知症の方の支援ニーズがある

「本人ミーティング」の開催が推奨されてきている現状がある

②若年性認知症支援コーディネーターと共同開催

開催に県の協力を得ることができる。

市が開催するつどいに、県内の当事者も迎えて

開催することにしたい。

③経費について

会場費は市の事業とすれば、減免対象となる。

企画通過

⇒結論

「県内から参加者が集まり、市内で活発に開催することは、市内の若年性認知症の方にとっても有益である」

具体的な作業へ

▶役割分担

◎推進員・・・主担当(2名)

会場確保

全体の構成を検討

市内の参加者調整

各包括、認知症疾患医療センターに開催案内
市広報誌に掲載手配

◎若年性認知症支援コーディネーター・・・協力者

県内の参加者調整、当日参加

埼玉県ホームページに掲載手配



プレ開催 平成30年5月10日(木) 10:00~12:00

当日参加者 7名 (鴻巣市内4名、市外3名)

- ・事業説明
- ・今後の開催内容について、当事者の意向確認
「来たい人が、来たい時に事前申し込みなしで参加できる方が、負担にならなくていい」
- ・つどいの名称について
『ブルーメンの会』に決定

ブルーメン(Blumenn)
=ドイツ語で「花」
花のまち鴻巣にちなんで

市担当者・推進員・コーディネーターと最終確認

- ①会の進行全体は推進員が行う。
(進行役を参加者の役割にしたいと考えていたが、当事者の拒否が強かった。負担なようである。)
- ②駅から会場までの移動が一人では不安な人がいた。駅まで迎えに行く必要がある→当面電車で移動するコーディネーターが担当。
- ③当日の内容は、その場の話題から展開するのが良い。
- ④席札を準備する。
互いに名前を呼びあいたい
- ⑤当日の参加者の把握は、市内は推進員、市外はコーディネーター



実際の活動

★会場設営(参加者も一緒に)

★毎回の内容

・自己紹介(何かお題を加えながら。

例 今年チャレンジしてみたいこと等)

・自由な語りの時間

話題はその時々で、和気あいあいと展開。

「苦労」も「工夫」も「希望」も語れる場。

同じ認知症という病名でも、症状や生活のしづらさは様々。

互いに話してこそわかることが沢山ある。

各自生活の中で、いろいろな工夫を取り入れていることが共有されている。

・情報提供、その他

・本日の振り返り

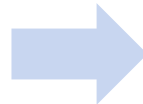


『ブルーメンの会』のいま

隔月開催（平成30年度 奇数月 第4木曜日）

平成30年5月（プレ開催）		
市内参加者 4名	男性	2名
	女性	2名
市外参加者 3名	男性	2名
	女性	1名

（3市町）



平成30年度全体		
市内参加者 4名	男性	2名
	女性	2名
市外参加者 6名	男性	5名
	女性	1名

（5市町）

◎「女子会」に参加した2人の今は・・・

会場は自宅から自転車で移動できる場であり、自分の力で参加ができることが自信につながっている様子。毎回期待を寄せて参加を継続中。（前日・当日の呼びかけは必要）ここで出会う人は「仲間」、と話す。

介護保険施設でボランティア活動をしている参加者の話を聞いて、自分もやってみたいと希望を話す。

Aさん・Bさんとも、それぞれのボランティア活動に参加へ



▶参加者の感想

◎病気をオープンにして話すことができるのは宝だ。(男性)

◎失敗することがあっても、話すことができると、気持ちが楽になる。そうでなければ一人で抱え込んでいた。ここでは安心して話せる。(男性)

◎ボランティア活動をしている人の話を聞いて、自分もやってみたいと思った。
(女性)

◎やっぱり外でいろいろな人と話した方がいいんだね。(男性)

◎“話すテーマがない”のがいい。とりとめのない話ができるのもまた良い。
(男性)

◎ここに集まる人はみな「仲間」。仲間っていい。(女性)



アンケートを実施しました

アンケート実施日：平成30年11月22日

アンケート回収数： 7通

・ブルーメンの会に参加する目的は何ですか？（複数回答可 特に、は◎）

- 困りごとを話し合いたい…………… ○5 ◎2
- 近況を話し合いたい…………… ○6
- 生きる張り合いについて話し合いたい…○5
- これから役立つ情報を得たい……………○6 ◎5
- 将来どうなるか知りたい…………… ○5 ◎1
- 同じ境遇の人と話し合いたい…………… ○5

スタッフからの情報提供だけでなく、互いの話題の中に情報は盛り込まれている

・ブルーメンの会に期待することは何ですか？（自由記述）

- ★自分と同じような境遇の人とたちが失敗談をしたり、その時の対処の仕方などの話をきくことは自分のためになる。
- ★生活の上で役立つことを自分も取り入れたい
- ★生きる張り合いについて話し合いたい
- ★本音で話し合いたい。生きる力にしたい。
- ★誰でも自由に、何でも話し合い、生きる張り合いにしたい



▶「ブルーメンの会通信」

参加者から、「当日参加できなくても、その時の活動内容がわかり、繋がりを保てるようにしてほしい。」という提案から誕生。

推進員が作成することに。
でもこれを渡すのは結局2ヶ月後の
「ブルーメンの会」・・・?

活動周知にも活用できるので、
埼玉県のホームページに掲載されることとなる。



最新号のみ 埼玉県のホームページに掲載中

<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0609/ninchisyosesaku/jakunen.html>



今後の活動の展開は・・・

つどいの参加者の中から、

・「自分たちのことを知って欲しい」

⇒地域の人たちに、本人の声を届ける機会をつくり、
認知症の理解を広める活動に繋げていきたい。

・「みんなで『RUN伴』走ってみようよ」

(マラソンが趣味の方から)

⇒会場を出て活動を広げるのもいいかも。

本人の声、希望をどのような形で実現するのか、
支える形をつくるのか。

会の中で練り上げていくことも必要？！



この活動から見えてきたポイント

Aさんの声

Bさんの声

『2人揃えば地元でつどいができる』

【2人の女子会】

同じ境遇の人とまた話がしたい



【若年性認知症支援

コーディネーターの提案】

まだ活動場所のない市外の人も一緒に参加を！

本人の言葉から推進員としての活動のヒントが見えてきた。

若年性認知症の人が集まる場が必要＝地域ニーズ



行政との共有
実現へ向けて…

他の専門職との連携
思わぬ展開もチャンスへ



推進員活動の今後の課題（本人つどいから）

◎地域の中には、本人同士の出会いの場を求めている人は他にもいるはず・・・

本人・家族にその情報が届く機会が必要である。

「ブルーメンの会」の活動、そこで活動している「本人の姿」を知ってもらうことから、その機会につながるかもしれない。

さらなる出会いの場の形成

「ブルーメンの会」活動の発展との連動？

◎仲間と出会いたいのは、若年性認知症の方ばかりではないはず。

参加世代を問わない「本人つどい」の開催

⇒今後も認知症の本人や家族の声を活動のヒントに。
またその活動を展開する中から、新たなヒントが生まれていく可能性も大事にしたい。



鴻巣では、ひとりひとりの「声」を組み合わせたら、共有できる「場」が生まれました。

そして「場」に集う方々の声にさらに耳を傾けることで、また新たな展開の道筋が見えてきたかなと感じています。

何かをやらねば・・・と気負わなくても、この「声をどう活かす？」
ととらえることから活動はスタートできました。
動けば地域の方々の笑顔と出会えます。
推進員活動を、楽しみましょう！！



鴻巣キャラクター
ひなちゃん